

女子教育に  
身を捧げた

順正女学校の礎を築く

私立順正女学校は裁縫科と文学科をもつて、明治18(1885)年1月、正式に創立された。教員が文学科創設に大いに協力したので、教会との関係は以前にも増して深まったため、町民の中には「伝道学校」と非難する人もいた。しかし、援助なしには私立の女学校を運営することは困難で、教員の支援は、かけがえのないものであった。福西志計子にとって信仰は活動の原動力であり、キリスト教の精神によって学校を経営したが、学業と信仰は別で、生徒に信仰を強要することはなく、生徒のなかで信徒になった人は少なかった。

福西志計子

第4回

文 児玉 享さん

初代の柴原宗助教長は明治19年に辞職して京都に移り、二代目として柳井重宣校長が就任する。彼も最初からの後援者であり、クリスチャンである。大高檀紙の製造は父の代で終わり、松山戸長、明治17年から県議会議員をしており、畜産業で活躍した実業家で、地域の発展に尽力した信望の厚い人であった。

当時、筒袖、袴に革靴の時代から、洋装時代に移ろうとしていた。県下でも明治17年には岡山中学校が洋服で制服が決められ、明治19、20年より下道郡、上道郡の男子教師は洋服着用が決められた。こうした時代に対応するため、福西は明治20年単身上京して神田職業学校に学び、洋服の仕立て、西洋洗濯、毛糸編み物、造花、手芸などの技術を修得し、翌年帰郷し、高梁に初めてミシンをもたらししている。こうして新しい時代に応じた教育内容が導入され、順正女学校の名は高梁の名前とともに、遠い所まで響き渡った。



教育内容の充実につれて生徒が多くなって、新校舎建設の願いが高まっていた。順正女学校の設立時より、厳しい財政を救うため1銭講が始められ、明治39年まで続いている。また明治23年後半より木曜日会が生まれた。これはキリスト教信者の教師が校舎の新築を願う祈りの会で、その熱意は協力者を動かし、明治26年10月6日に第一回の新築相談会が開かれた。そこで募金を呼びかける新築趣意書が作られ福西、木村静のほか、板倉信古、柳井重宣、石川豊次郎、榎屋幸完、藁内鉦一郎、東三省など54人の新築委員が選ばれた。

順正女学校新築趣意書を要約すると、「過去7、8年間の我が国の女学校

は欧米の模倣の傾向があり、学は高遠で、芸は浮華に流れ、日本婦人特有の優美、貞淑を忘れていた。そのためこの2、3年来、女学校は衰微しているが、女子教育はないがしろにすべきでなく、学を以って知を研ぎ、得を修め、技芸で身を立て、家を保つことを目的とし、良妻賢母を得る教育は国家の急務である。順正女学校はこの主義を採り、明治14年7月より明治27年に至る13年間、全国で幾多女学校が興廃するなか、益々栄え、その教育は社会に適し、卒業生は人の師、良妻となる。今我が校百数十人の生徒を有し、教場狭く、これ以上生徒を入れる余地がない。今回校舎新築を企図している。我が校の主義に賛成し、この計画の賛助を願う」

この呼びかけ以後、福西は以前にも増して寸暇を惜しんで東奔西走し、新築委員をはじめ高梁町民の協力によって、約三千円の寄付金を集めることができた。

(次号へつづく)